

第三章 ヘーゲル歴史哲学の問題点

この章では三つの問題を取り上げて、それぞれ一節ごとに論じた。先ず第一節では、理性の狡知についてである。そこでは、自由の実現のため、人間が操り人形のように理性に操られ、歴史の目的実現の為に犠牲となっていると考えられる。その解釈について、ここで論じた。

次の節では、世界区分について論じる。東洋では一人が、ギリシヤ・ローマでは特定の人が、ゲルマンに至って全ての人が自由であるというテーゼに対して、ヘーゲルの意図を考察した。

最後の節では、歴史の終焉の問題について考察した。ヘーゲルの歴史が終わると言ったことは、最大の批判を浴びた。人間は地球上に生存するかぎり、歴史は続くと考え。何故、ヘーゲルは歴史は終わると言ったのか論じた。

結 論

ここでは、いままで見てきたヘーゲルの歴史哲学がいかに関現実を見つめていたか論じ、現代社会との対比を述べた。そして現代の我々は歴史に対して何を求めるかを論じた。

遊戯療法における治療者のラポールの認知に関する研究

——ラポール測定尺度によるラポールを構成する因子について——

赤 田 太 郎

目 次

I	目的と問題
I-1	目的及びその背景
I-1-1	① 本研究の目的
I-1-2	② 本研究の背景
I-2	先行研究の概観
I-2-1	① ラポールの定義について
I-2-2	② ラポールと場の雰囲気・時間の研究
I-2-3	③ ラポール体験モデル
I-2-4	④ 子どもの非言語的コミュニケーションにおけるラポールの表現について
I-3	先行研究の問題点と本研究の位置づけ
I-3-1	① 先行研究の問題点
I-3-2	② 本研究の位置づけ
I-4	本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義
I-4-1	① 本研究の基礎となる理論的枠組み
I-4-2	② 用語の定義
II	方法

II-1	対象者と調査時期	III-3-4	クライアント体験尺度の調査項目
II-1-1	① 調査の対象者	III-3-5	セラピスト体験尺度の調査項目
II-1-2	② 治療の対象者（クライアント）	III-3-6	すべての調査項目（参考）
II-1-3	③ 治療技法について	IV	考察
II-1-4	④ 調査時期と場所	IV-1	各尺度の因子分析による結果の考察
II-2	調査項目の設定	IV-1-1	① 概念尺度の調査項目
	〔調査項目〕	IV-1-2	② 場尺度の調査項目
	〔作成された質問紙の概要〕	IV-1-3	③ クライアント体験尺度の調査項目
II-3	調査の方法の妥当性	IV-1-4	④ クライアント行動尺度の調査項目
II-3-1	① 測定項目の内容的妥当性	IV-1-5	⑤ セラピスト体験尺度の調査項目
II-3-2	② 測定項目の概念的妥当性	IV-1-6	⑥ セラピスト行動尺度の調査項目
II-4	質問紙の信頼性	IV-2	各尺度における調査項目の相関の考察
II-5	調査結果の整理方法	IV-2-1	① 概念尺度・場尺度の調査項目
III	結果	IV-2-2	② クライアント行動尺度の調査項目
III-1	各調査項目の結果	IV-2-3	③ セラピスト行動尺度の調査項目
III-1-1	① 尺度の調査項目	IV-2-4	④ クライアント体験尺度の調査項目
III-1-2	② 尺度の調査項目の総和	IV-2-5	⑤ セラピスト体験尺度の調査項目
III-1-3	③ 各尺度における（全因子得点）	IV-3	総合的考察
III-2	各尺度における調査項目の因子分析の結果	IV-3-1	① 遊戯療法における治療者の現象的なラポール認知のあり方とラポールの定義
III-2-1	① 概念尺度の調査項目	IV-3-2	② 現象的ラポール（概念尺度・場尺度）の関係性について
III-2-2	② 場尺度の調査項目	IV-3-3	③ クライアント体験モデルの再考
III-2-3	③ クライアント体験尺度の調査項目	IV-3-4	④ ラポール体験尺度・行動尺度の示す因子の内容について
III-2-4	④ クライアント行動尺度の調査項目	IV-3-5	⑤ ラポール測定尺度の臨床適用の可能性について
III-2-5	⑤ セラピスト体験尺度の調査項目	IV-3-6	⑥ ラポール測定尺度の解釈の試み
III-2-6	⑥ セラピスト行動尺度の調査項目		
III-3	各尺度における調査項目の相関の結果		
III-3-1	① 概念尺度・場尺度の調査項目		
III-3-2	② クライアント行動尺度の調査項目		
III-3-3	③ セラピスト行動尺度の調査項目		

〔事例2〕四六歳大学教授

V 結論

V-1 結論

V-2 今後の課題

V-2-① 各尺度について

V-2-② ラポールを質問紙法で測定すること

〔巻末〕 引用文献 参考文献

表1-表6

I 目的と問題

本研究の第一の目的は、まず心理臨床に関する辞書にあるラポールの定義や、経験則による臨床的研究に基づいて質問紙を作成する。そしてそこで得られた結果を基に、遊戯療法における治療者のラポール認知のあり方、ラポールの構成因子、概念的ラポールと現象的場の関係、ラポール行動尺度間の相関という、以上の四項目について検討し、明らかにすることである。最終的に抽出された因子の結果から、治療者側からの認知に基づくラポールの定義を行う。

第二の目的は、本研究で利用される質問紙を臨床適用できるかどうかを検討することである。臨床心理学の研究は、心理臨床の現場において役立ち、活用されるものでなければならぬ。その点から、本研究においてラポール測定尺度が心理臨床に実際に利用できるのかということを検討する。

本研究で採用した質問紙法は、遊戯療法における治療者のラポール認知のような主観的臨床的な事柄を、数値という客観的な形で示

遊戯療法における治療者のラポールの認知に関する研究

すことできる。このことは、科学性に欠けるといわれる心理臨床において、心理現象を科学的な客観性を持って示すことが可能であると考えられる。

II 方法

プレイセラピーの治療者がどのようなラポールを感じているのか、クライアントとの関係はどのように感じているかについて測定するために、ラポール測定尺度を作成する。そしてそのラポール測定尺度を作成するために、本研究の理論的枠組みとして、(A)現象的なラポールの認知、(B)クライアント体験の認知、(C)クライアント行動の認知、(D)治療者自身の心身の四項目を設定した。そこから、「概念尺度」「場尺度」「クライエント体験尺度」「クライエント行動尺度」「セラピスト体験尺度」「セラピスト行動尺度」という六尺度を作成した。

調査は、近畿地方の児童養護施設などで遊戯療法を行っている治療者四五名が行う一〇二治療回数を対象にした。また、本研究はクライエントを子ども(幼児から小学校六年生)を対象にし、遊戯療法の場合に焦点をあてて測定を行った。

調査の期間は、二〇〇四年五月一〇日ー一〇月一日において調査した。場所は大学、研修会会場、大学心理相談室、児童養護施設など随所で調査をした。

作成された質問紙は、名称を「ラポール測定尺度」とし、解答

法…5段階評定法、項目数…一一〇項目とした。

III 結果と考察

III-1 遊戯療法における治療者の現象的ラポール認知のあり方とラポールの定義

概念尺度、場尺度では、セラピストがラポールを認知するまともさが明らかとなった。概念として考えられていたラポールは、実際の治療場面では四つの因子として構成されている。ラポールは、第一因子では基本的に、暖かい感情であること、好感を持っていること、感情を分かり合えていること、関係は安定していること、スムーズなやりとりであることということが同一次元に語られているということである。この結果から、項目同士が高い関係性を持つており、ラポールが形成される場合その内容はすべて同時に生起するものであることが分かった。

一方で、第二因子以下はそれぞれ別の次元で抽出されているとも考えられる。これは、第一因子とは別に存在する、その他の現象として捉えることも出来る。つまり、第一因子が生じていない状態での二人の感情の一致も起きていることになる。このことから、第一因子があることによって、第二因子や第三因子が生まれる場合もあるという、ラポールの定義に付随する現象を説明するための因子であることが伺える。ここから、今までのラポールの定義が、主体となるラポールの現象（第一因子）と、そのラポールの現象に付随

して生まれる現象（その他の因子）の二面から構成されていることが分かる。そこで、同一次元に生まれる現象的なラポールをまとめると、治療者の認知によるラポールを以下のように定義できる。

「ラポールとは、クライアントが自分自身に好感を持ち、暖かい感情の交流がスムーズに行われている状態で、感情の分かち合いが出来る関係である。そしてそれは、容易に壊れることなく安定し、お互いの信頼が生じている関係である。」

III-2 現象的ラポール（概念尺度・場尺度）の関係性について

場尺度においても相関から、概念尺度との関係がかなり強いことが証明された。概念的なラポールの関係を取ることが出来ているセラピストは、場の雰囲気も良好であると感じていることが明らかになったと言える。今後、さらに現象的ラポールに焦点を当てた一歩踏み込んだ研究（哲学的考察）が必要であることが示唆される。また、場尺度の因子分解の結果から、場と時間との感覚が同一因子の次元に生じたことが非常に興味深い。時間がスムーズに過ぎるならば、その申の雰囲気も同時に良いものとなっているということができる。セラピストにとって、場の感覚と時間の感覚が非常に密接に関わっていることが明らかにされたといえるだろう。

III-3 クライアント体験モデルの再考

クライアント体験尺度では、セラピストがクライアントの体験をどのように認知しているかについて因子分析を行った。分析結果からは、先行研究の小川の分類に類似した因子が抽出された。ここから、小川の臨床経験から分類したラポール体験モデルは、実際の質問紙による測定によって支持されたことになると思われる。ただ、本研究の第二因子『働きかけに抵抗がない態度』は、小川のどの体験にも当てはまっていない独立した因子となった。本研究の結果から、第二因子を小川の分類に加え、セラピストが考えるクライアントのラポール体験を整理すると以下の分類になる。

- 1、クライアントはセラピストの理解しようとする気持ちと感じている態度
- 2、クライアントがセラピストの働きかけに対して抵抗しない態度
- 3、クライアントはセラピストが親切だと考え、素直に話そうとする態度
- 4、クライアントがセラピストの提案によって成功する姿
- 5、クライアントが自分のことを安全であると考えていると思われる態度

本研究の結果、セラピストがクライアントラポール体験モデルを理解しようとする時、セラピストは、クライアントの態度から理解しようとしていると言える。本研究において、小川の分類をセラピストからの視点からどのように認知されるかについて示したことは、

ラポール体験モデルの実際を示すことになり、また、われわれが心理臨床を行う際の実際の視点になるうと考えられる。

III-4 ラポール体験尺度・行動尺度の示す因子の内容について

ラポールの目安になる項目で構成されている体験尺度と行動尺度は、様々な組み合わせにより、遊戯治療全体の雰囲気や様子についての因子として抽出されるということになった。ラポール測定尺度によって実際の心理臨床の中でラポールの行動を把握することができるならば、遊戯治療がどのような状態であるかを明らかにすることが可能となる。

結果的に体験尺度と行動尺度は、ともに、ラポールを認知する項目は遊戯療法の状態であることを表した。心理臨床では、治療の状態を知る上でラポールの認知測定が有用であることが示されたといえる。

III-5 ラポール測定尺度の臨床適用の可能性について

ラポール測定尺度は、セラピストがどのようなラポールの要因を認知しているかについて測定するものである。その測定内容は、上述の構成要因の因子分析の結果により、様々な組み合わせによって、プイレセラピー全体の雰囲気や様子について知る因子として抽出された。ここから心理臨床での適用を考えると、遊戯治療がどのよう

な状態であるかを理解することが出来ることもわかった。この結果から、個人の因子得点を算出することによって、個人が因子の内容にどの程度関与しているかを、絶対値で示すことができる。また、個人の各尺度毎の総和得点によって、先行研究の定義するラポールの傾向について示すことができると思われる。行動療法の技法に、モニタリングというものがある。本研究におけるラポール測定尺度は、モニタリングをすることができると思われる。あくまで試案ではあるが、個人データを分析することによって治療の状態を把握することができると示唆される。ただ、完全にスーパージョンをゆだねることは危険である。その理由は今後の課題として後にまとめた。

III-6 ラポール測定尺度の解釈の試み

上記の考察から、それぞれの個人の尺度得点、因子得点を算出する。その得点を用いて個々人が尺度や因子とどのくらい関わりがあるかについて示す。そこで得点の数値の意味を明らかにする必要がある。そこで因子得点が高い場合、どの様に状態であるかについて各因子ごとに考察した。また、得点の解釈の基準として、仮に記述統計の平均値と標準偏差を参考に用いて、グループ内の比較による解釈を行った。

事例1では、大学院生二回生で臨床経験の浅い、初回ケースをあげる。このケースは、まだ経験の浅いセラピストが初回の治療でど

のようなラポールを捉えているかに関する一例である。事例2では、大学教員であり、遊戯療法の二五年の経験者であるセラピストの担当するケースの第九〇回を取り上げてみたい。このケースはラポールが生じている見本となる好例である。

IV 今後の課題

今後の研究で必要とされることは、より質問項目を精査することによって、標準化された尺度として完成させることである。さらには場や時間の感覚とラポールの関係が因子分析などの研究によってより具体的にどのように構成されているかについて研究する必要があると思われる。ラポールの推移に関しては、ラポールの測定を縦断的に行う研究が必要である。

また、本研究ではセラピスト側でラポールをとらえているのであって、クライアント側からのラポールの測定はされていない。クライアントからのラポール認知がどのように行われているかという研究が今後、必要とされると思われる。

また、ラポールを逆転移と捉えて解釈すると、セラピストの内的対象との関係による認識でラポールを捉えた場合、実際のラポールの関係性と一致しているとは限らないことになる。その点が常に治療について熟練者によるスーパージョンが必要となる理由である。こうした内的対象の問題について考えるとき、オーバーラポールの問題や、ラポールの二面性の存在についての問題が浮かび上がる。

いずれにせよこのようなラポールの問題は今後のさらなる研究が必要である。

風景構成法における大学生の孤独感の表現について

稲 葉 豊 和

目 次

1	目的と問題
1-1	目的およびその背景
1-2	先行研究の概観
1-2-1	風景構成法に関する研究
1-2-2	青年期の孤独感に関する研究
1-2-3	投影法と孤独感との関係に関する研究
1-3	先行研究の問題点と本研究の位置づけ
1-4	本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義
1-4-1	本研究の基礎となる理論的枠組み
1-4-2	用語の定義
2	方法
2-1	予備調査
2-2	本調査
2-2-1	対象と調査時期
2-2-2	調査方法
2-2-3	調査方法の妥当性
2-2-4	調査項目の内容的妥当性
2-2-5	調査項目の概念的妥当性
2-2-6	調査方法の信頼性
2-2-7	調査結果の整理方法